

平成 29 年度第 1 回図書館セミナーを開催！！

平成 29 年 6 月 28 日(木)医学図書館 1 階ブラウジングコーナーにて中根裕信先生（医学科解剖学）を講師に図書館セミナー「しる：探る 気づく 理解する」を開催しました。この度は「外科のルーツを探る」に焦点をあてお話しされました。

床屋外科医は、散髪、ひげ剃り、イボなどの切除、抜歯、瀉血、開いた傷の焼灼、緊急時の手足の切断(戦場で)などの処置を行いました。理髪店でみかける赤・青・白のサインポールは、当時、床屋外科医が治療で行っていた瀉血に由来するとのことでした。まず、過去と現代の外科手術の違いを参加者へ尋ねられ、今回取り上げる時代は麻酔も消毒もなかったことを挙げられ、近代外科の祖と呼ばれるフランスの外科医「アンブロワーズ・パレ(1510-1590)」について話されました。

当時は感染の概念はなく、戦争で銃などによる傷は体に火薬の毒が入ると信じられていて、この毒を消すために、傷口に、煮えたぎった油をつけた布や焼き鍋を当てるなどの過酷で野蛮な治療が広く行われました。ですがこのような治療をしても傷口が化膿して亡くなる方も多く、パレは患者の苦痛を減らし人々を救いたいと考えていました。たまたま、パレは治療に使っていた油がなくなったため、代わりに軟膏を塗り、包帯を巻いて苦痛の少ない治療を行ったところ、多くの患者の命を救うことができました。しかし、この治療は当時の常識とはかけ離れていたため、パレ自身は、翌日、多くの死者がでるだろうと悲壮な覚悟をした上での重たい決断でした。パレは、「私が患者を治療し、神が彼を癒したもう」の自身の言葉が示すように、愛をもって患者を癒した心優しい外科医でした(患者の自然治癒力を引出す)。治療法の開発は、医療者の人柄をも反映しうると考えると、パレの人柄故に導きだされた苦痛を軽減する治療法とも言えるとのことでした。その意味で、医療者の人間性が及ぼす医療への影響の大きさを感じ、同時にそれを目指す学生さん達に豊かな人間性を身につけていただきたいと強く感じました。

ご参加いただいた方からは「今の外科治療は当たり前の物ではなく、様々な経緯を経て成り立ったものだ」という意識を持っていたので、そういった視点から外科学を学べる、「患者さんのことを思ったり、考えたりする姿勢は実習などで患者さんに向き合うときに役立つのではないかと思います」などご感想を頂きました。

参考文献：「近代外科の父・パレ」, 森岡恭彦編著, NHKbooks

「医学は歴史をどう変えてきたか」, アン・ルーニー著, 東京書籍

「まんが 医学の歴史」, 荒木保著, 医学書院

医学図書館では、学生さんに人体への理解を深めていただき、幅広い教養と人間力を身につけていただく契機となるよう今後もこのような企画を計画して参ります。皆様のご来館をお待ちしております。

